

梁井光二先生の遺徳を偲ぶ

松本康裕（旧名玉丸）（昭24）



梁井先生着任当時の初代助手として、その時代背景と先生の存在意義の深さを含めて60年前の記憶を辿りながら記述してみたいと思います。

鬱蒼たる樹木に囲まれたグビロヶ丘の学園に入学したが、原爆の一閃を境にさ迷い歩くことになる。当時の薬学専門部は大変な時期で、原爆後→佐賀市→諫早の小野島→長大経済学部→昭和町校舎そして現在地と流浪の民であった。「誠に気の毒な学生達であった」と高取治輔先生も語っておられた。小野島に学校が移っていた当時、学校が廃校になるか九大薬学部設立で吸収されるか、はたまた長崎医科大学が丁度トカゲが身を守るために尻尾を切り離すように切り捨てられるか、など色々な噂が飛んだ。

当時我々は文部省に嘆願すべく学生代表として吉田俊之君が一番ヶ瀬尚先生、久保為久磨先生と同行した。その嘆願書たるや記名捺印或いは血判と言うことになったが、戦時下の気風未だ覚めやらず（恩賜の銀時計組もいた）殆ど血判であったことを記憶している。それ程必死であった。ようやく存続が決定した後、学部長の川上登喜二先生が学校を復興させねばと思われ、その第一弾（母校）として梁井先生を口説かれ招聘することになる。先生は東大の落合英二教授の助手をされ、のちに三共の研究室に移られたときクロラムフェニコール（クロロマイセチン）の全合成を日本で始めて完成され名声富みに上がった時である。「長崎に梁井先生が行く」と大いに評価されたものであった。事実、その後落合教授のおとうと弟子に当たる小林五郎先生が来られて益々母校が活気づいた。

新製の長崎大学薬学部の教養部が長崎に出来たとき、専門部は諫早市のはずれ小野島の田園風景の広がる仮校舎の学校に先生御夫妻をお迎えする事になった。温厚篤実な先生と生粋の東京育ちで

誠に上品な長身の奥様と、未だお子様の無い仲睦まじい新婚の様な御夫妻でした。

卒業後1年経った私に川上学部長より梁井先生の助手につくように言われたがその責任の重さに困惑した。当時、小野島の仮校舎にはまともな実験器具はなく、薬品類もまた然り、購入するにも日数がかかり、然も揃わない状態であった。何しろクロラムフェニコールを合成した当事三共の研究室に無水酢酸が無くて東大まで貰いに行った話をしておられた程ですから。先生は長崎まで講義に行かれる以外の余暇には、御夫妻で海水浴に東望の浜に出掛けたり、写真撮影など小野島で田園生活を楽しんで居られたようです。しかし今思えば実験化学者として腕が疼き、気が焦っていたことと思います。その後学校も長崎に移り仮住まいの経済学部の商品学実験室を借りて実験する事になったが、古い昔の写真にあるような独逸式と思われる実験台は背が高く使い勝手が悪かった。それでも魚が水を得たように生き生きと楽しそうに実験をされておられる先生のお姿が誠に印象的であった。

先生が助手時代 H_2O_2 水を加えて反応させ濃縮していたらフラスコの底のハルツ状物質が突然ブクブクと泡立ってきたので危険を感じ咄嗟に実験台の下にしゃがみ込んだ。その途端爆発して台上の実験装置が木々端微塵に飛び散り廊下にまで及んだ。すんでのところ命拾いをしたと言われたことがあった。反応を注意深く観察することが大切で特に H_2O_2 を使った時は油断してはいけないと言われた。

こんなこともある。物理化学の末永栄一先生が学生実習を見回っていた時のことである。「危険なガスが出る実験をオープンでしていた学生がいたので、「そんなのはドラフトの中でやりなさい」と注意し、その後回って来たら何と、その学生本人が装置ごとドラフトの中に入っていたので慌てて引きずり出したことが有った」と話された。言葉は誠に難しいものではある。

—閑話休題—

昭和町の校舎に移り漸く研究が軌道に乗った時に私は病を得て、リタイアすることになった。回復後、薬剤学教室に移りその後、岐阜大・医・法医学（裁判化学）そして第一薬科大学と移ったが、やはり母校の事が何時も気になるものである。その後先生の研究の発展と学部長等の要職に付かれてのご活躍をお聞きしていたが、勲二等を受賞された時も、謙虚に淡々とされて居られてそのお人柄が偲ばれた。

また一方では待望の御息の御誕生での大変なお喜び様や、往年のバンカラな弊衣破帽の旧高校

生よろしく学生と一緒にあって浜の町通りでストームを組まれた元気な御様子など聞き及んで嬉しく思っていました。先生の助手であった事は生涯私の誇りであり希望の灯火^{ともしび}でもある。また人間的にも見習う事が多く温厚篤実なお人柄は私の生涯の指標です。

ふと空を見上げていたら遠い白い雲に先生の温厚な笑顔が語りかけていた。

何時までも私達母校を見守って下さい。

先生のご冥福と永久の安らぎを心からお祈り申し上げます
合掌

梁井光二先生の思い出

木下敏夫(昭35)

長崎大学名誉教授・梁井光二先生が平成15年10月17日にご逝去(享年88歳)されました。特別実習から助手時代を先生の許で研究と教育に携わってきました関係で、先生への追悼の意を込めて思い出の一端を書いてみたいと思います。

初めて梁井先生にお目にかかったのは、入学時(昭和31年)の誓約書に署名する時でした。当時先生は学部長をされており、署名に立ち会われたのです。その後、特別実習を受けるまで先生にお目にかかることはありませんでした。専門課程での「薬品化学実習」、「有機薬品化学講義」などは当時助教授であった小林茂先生がなされたので、梁井先生の講義を受けたことはありませんでした。その間、先生は肺結核を患われ入院されていたとうかがいました。

私は卒業後、民間会社に勤めていましたが、当時助手をされていた森本さんが退職されたので、後任として赴任することになり、再び梁井先生の許で研究を始めることになりました。研究テーマは特別実習で行っていた「ピリダジン(Pyridazine)誘導体の合成」で、当時ダイアジン(Diazine)の中で窒素原子が隣り合ったピリダジン誘導体のみが空白地帯であり、その誘導体の合成化学的研究は有用な医薬品を創製可能な一分野でありました。

先生は見違えるように健康になられ、毎日研究に、学生のご指導に専念されました。研究はスルファミン誘導体の合成に始まり、次第にピリダジン-N-オキシドの反応性に興味が移り、種々の新しい反応を見出されました。また、長い間構造不明であった化合物の構造を別途合成することにより決定され、結果的に、それが新しい環変換反応であることがわかり、反応機構と合わせて報告されました。薬学部全体のことにも心を配られ、研究に必要な大型機器を設置するために、科学研究費の機関研究の代表者になられ、当時最新鋭の機器であった「核磁気共鳴装置(NMR)」の導入にご尽力されました。NMRの威力は甚大で、反応生成物などの構造決定が短期間かつ容易に出来るようになり、薬学部の研究の推進に大いに貢献しました。

先生の研究に対する態度は、真摯そのもので、何時も白衣を着られ、自ら率先して反応・分離・精製を行われ、融点を測定され、研究に取り組みおられました。この情景は、先生が学部長、学生部長の重職を担われていた時でも変わりなく、暇さえあれば寸暇を惜しんで実験されておられ、そのお姿は私たちにとっては無言の教訓であり、今も鮮やかに目に焼きついています。また、元素分析値から化合物の組成式を求める場合4桁の割

り算が必要なのですが、私たちがガイセルの表を見るか、対数計算、筆算などで結果を出す前に、先生はそれを暗算で行われ、目的の化合物が出来ているか否かを判断されていました。

先生は、結晶状態を見たり、融点を測るときに使用する拡大鏡のことを「メガネ」と言われておりました。それを知らない学生が、先生が「メガネ」を取ってくれと言われた時、自分の「眼鏡(メガネ)」を外して先生に手渡したので、大笑いしたことがありました。その学生ももう定年を迎える年齢です。手先が器用な先生は、アルコール性アンモニアで化合物をアミノ化する際、ポンベと呼ばれるガラス管を閉じる、いわゆる封管を作るのが得意でした。氷で冷やしながらガラス管を徐々に伸ばし細くし、最後に閉じるのですがアンモニアが蒸発するので、これがなかなか難しく、私たちにはなかなか出来ませんでした。この封管を鉄製の管に入れてガスバーナーで徐々に加熱するのですが、作り方が悪いと名前のおり爆弾(Bombe：ポンベ)のように爆発します。最後の工程で、先生は先述の「メガネ」で入念に溶封が完全かどうかを点検され「これなら大丈夫だ」と言われると、ほとんど爆発しなかったのですが、私たちが作った封管はよく爆発し、あたり一面アンモニア臭とガラスの破片を撒き散らしていました。

学生争議が盛んな頃、評議員をされていました。評議会の開催中、学長をはじめ出席者全員が学生達に軟禁され、警察機動隊の出動でやっと翌早朝開放されたことがありました。この時、奥様は所用で上京されており、小学生であった「健一君」のことをずいぶん心配されておられました。その「健一君」も立派に成長され、二人のお嬢さんの父親になり、声はもとより面影も先生にそっ

くりになっています。

昭和51年には、学生部長の在任中にもかかわらず、学部長事務取扱(文部省と見解の相違があり、事務取扱となっていた)に選出され再び学部の運営に携われることになりました。2年後、再選された時学部長事務取扱のまま定年を迎えられることになりましたが、どうしても先生を「学部長として定年をお迎えさせたい」との多くの教官の願いで、学部長の事例が発令されることになりました。このことは、学部長選挙に関して文部省との軋轢のため、長い間学部長事務取扱という学部としては不本意な状態が続いていましたのですが、先生のご人徳と先生への厚い信頼感のなせる業で一気に解決し、先生は学部長として無事定年を迎えられました。

先生は非常に謙虚な方で、私たちが先生の還暦のお祝い、勲二等叙勲のお祝いを計画した時など「そんなお祝いはしないでくれ」と固辞されましたが、定年退官祝賀会の時は「教室出身者が一堂に集えるのは、この祝賀会しかないのでこれだけは実現させてください」と、何度もお願いした結果やっとうご了解を得て、唯一無二の祝賀会を催すことが出来た次第です。

私が大変お世話になった先生方の中で、すでに、小林五郎先生、桑山良像先生、倉石典先生が鬼籍に入られ、さらに梁井光二先生がご逝去され、その寂しさは一入です。

梁井先生、大変お世話になり本当に有難うございました。安らかに眠りください。

合掌

追記：先生のご略歴は「長薬同窓会報」第43号(2003年)5ページに掲載されています。